活動報告―グアテマラ―

岡崎　和美
（16－1，グアテマラ，小学校教諭，金沢市立高尾台中学校）

中米グアテマラ。コーヒー豆と鮮やかな民族衣装が有名なこの国で、約２年間活動した。

国の概要について

面積は日本の約３分の１、人口は約 10 分の１。中南米の他の国々に比べ、先住民族の割合が高い。公用語はスペイン語だが、地方に住む先住民族の間では現地語が主に話されている。

日本のコーヒー豆売り場ではたいていグアテマラという銘柄は見かけるし、缶コーヒーでもグアテマラ産を強調したものがあるけれど、グアテマラ国内で庶民が飲むのは、薄くて甘い麦茶のようなインスタントだ。豆は輸出されてしまう。現地で本物のコーヒーを飲むときは、観光地へ行った。

先住民族の民族衣装は村ごとに模様があり、その色彩はグアテマランレインボーといわれ旅行者にも人気である。私が活動したソロラという町は、男性の派手な衣装が特徴的であった。市場の日は、民族衣装を着た人たちで広場が埋めつくされ、壮観である。

写真１　グアテマラ　ソロラのお祭り

マヤの人たちによると、人間はとうもろこしから生まれたとのこと。したがってこの国でもとうもろこしが非常に重要な食物で、主食はとうもろこしの粉を薄く焼いたトルティーヤというパンである。これを片手に、味付けされたお米や肉類等のおかずを食べる。ホームステイ先がレストランだったこともあり、食生活は充実していたと思う。果物や野菜が豊富でおいしく、日本と比べてどちらを豊かというのかと考えることもしばしばであった。

インフラ整備の程度や日用品の質等、日本とは確かに違うが、派遣前にかなりの覚悟をしていたため、予想以上に発展している感があり、生活面は概ね良好であった。

活動について

中米各国で展開されている算数学力向上プロジェクト、その中のグアテマラ算数プロジェクトの一員として派遣された。グアテマラでは小学校の留年率が高く、国語（スペイン語）と算数がその大きな原因である。それらのうち日本は特に算数教育への協力をしている。

写真２　GUATEMATICA

活動内容は、小学校算数教科書（GUATEMATICA（グアテマティカ））と指導書の作成、GUATEMATICA を使った授業の観察、教員対象の講習会、学力テスト等。ちなみに GUATEMATICA は「グアテマラ」と算数のスペイン語「マテマティカ」から作られた名前である。

グアテマラ国内の４県の教育事務所に１名ずつ隊員が配属され、そこでそれぞれ現地人のカウンターパート（同僚）１名と共に活動していく。各県４校のプロジェクト校が選ばれ、そこで GUATEMATICA を使った授業が行われる。基本的に午前中は学校を訪問して授業観察や講習会の開催、午後は教育事務所で教材の準備等をする。学校の休暇中（10 月後半～12 月）に教科書・指導書の作成となる。

シニア隊員を中心とした数名の小さなプロジェクトであった。シニア隊員は非常に忙しい中、何かと隊員達との交流の機会を設けてくれ、終始アットホームな雰囲気であった。プロジェクト内で共有できるものも多く、非常に心強かった。

授業観察は、子供たちと触れあうことのできる楽しい時間であった。すでに先代の隊員が活動していたので、子供たちは慣れており、物怖じせずに話しかけてくる。どの国でも、子供はかわいいなあ、と思う。また、実際に GUATEMATICA が使われている現場を見ることができるのも良かった。

写真３　授業風景①

小学校低学年の授業では、ペットボトルやガラス瓶のジュースのふた等を半具体物として授業に使っていたのだが、児童によってはとうもろこしの粒を使っており、それがいかにもこの国らしく思われた。半具体物を使わない授業になっても頭の中だけで計算するのは難しいらしく、こっそり手に棒を書いて数えたりする姿が見られるのが微笑ましかった（学力向上の点から見ると困ったことではあるが）。

休み時間は校庭でバスケットボールかサッカー。カメラを持っていると、写真を撮ってと近寄ってくる子がいたり、恥ずかしがって隠れる子がいたり。おやつの時間でもあり、先生も近くのお店からお菓子を買ってきて食べている。もちろん私もだ。

講習会は、先生たちに授業の仕方を教えるためのものであった。時には授業の仕方というよりも授業そのものになってしまうこともあったが、皆いつもまじめに参加してく

れていたと思う。ここでは、説明だけでなく何か作業を取り入れると効果的であること、教材や道具の大切さ等を改めて感じた。

教科書・指導書は、日本や先にプロジェクト展開されているホンジュラスのものを参考に、グアテマラならではの思考や言葉、絵などを織り込んだものである。作成に関して私はあまり活躍していないが、自分たちが作った問題や絵が実際に本になると、やはり感慨深いものがある。これらは現在グアテマラ全国の小学校に配布されることになった。

写真４　授業風景②

隊員活動でとまどったこと

まずは言語である。上達せず、ずっと悩みの種であった。また、子供たちもスペイン語ができないということ。そのため、スペイン語で行われる授業がわからない。教育を受けるため、生きていくために、彼らにとってスペイン語は必須なのだ。日常生活では現地語が主で、両親ともにスペイン語が出来ないという家庭も少なくないことから、解決には時間のかかることを感じた。

次に学校や授業のシステム。先生のストや会議、学校行事等で授業時数が確保されない。ということは、一年分の教科書が終わらないまま次の学年になってしまうということだ。もちろん、新年度に、前年度し残した部分から授業を始めるわけではない。新しい教科書の１ページ目から始まる。

これには、先生だけでなく国全体の教育に対する意識が影響しているのかもしれない。さらに広げていくと、国の歴史や政治にまで関係していく。どのような教育が良いかといわれると難しいが、子供たちが、それぞれ適切な教育を受けられることを願う。

隊員活動を通して感じたのは、他の国の人々に対しても、日本の生徒に対しても、こちらの活動や考え（授業）を受け入れてもらうには「興味・関心を持ってもらうこと」が大切であるということだ。「こうするとお金が儲かる」でもいいし、「このことについて知るのが純粋に面白い」でもいい。「物質的に」でも、「精神的に」でも、「これは自分にとって得なことだ」と彼らが思うこと。彼らが自分から欲するよう

写真５　休み時間

にすること。ただ、この２年間の活動中は、活動自体が受け入れてもらうに値するものであるか、彼らとの価値観の違いの中で迷うこともあった。

　いろいろなことがあったが、すべてひっくるめて、良い２年間であった。教師という仕事について、また違った見方で考えることもできたように思う。今後、周囲への還元や派遣国とのつながりについては、地道に長く続けていければと思っている。